

語るときは真実を語るように。

人に対しても、自分に対しても、決して怒ってはならない。

自分が貧しくなるうとも、自ら施しをせよ。

この三つのことを実際に行え。

そのときにお前がこの世を離れる。

ブツダ：釈尊

「ウダーナヴァルガ」第20章

悟りに至る三つの処方箋

語るときは真実を語るように。

人に対しても、自分に対しても、決して怒ってはならない。

自分が貧しくなるうとも、自ら施しをせよ。

この三つのことを実際に行え。そのときにお前がこの世を離れる。

ゴータマ・シッダッタ（釈尊） / 「ウダーナヴァルガ」第20章（怒り）16番



釈迦涅槃像（ミャンマー）

出典：『超訳 仏陀の言葉』白鳥春彦著

初期仏教の概要いくつか

・ 仏教の背景：バラモン社会と自由思想

アーリア人が紀元前10世紀ごろからもたらしたバラモン教の聖典「ヴェーダ」（祭式、哲学）は、聖語であるサンスクリット語で口承され、のちのマヌ法典（行動規範）は紀元前後に編纂される。

前6世紀ごろにはガンジス川流域では農耕が発展、都市化が始まり、十六の小国家が成立する中、紀元前4世紀ごろマガダ国が中流域を支配する。商業や交易が発展し富裕層が登場してくると、家庭・労働・所有を放棄した出家修行者らが登場。伝統的バラモンに縛られない新しい思想（唯物論、懐疑主義、運命論、虚無主義、ジャイナ教など）が現れるなか、5世紀頃釈尊によって仏教も生まれる。

・ 第一結集：釈尊入滅後三ヶ月後 教と律

五百人の高弟らが集まり、釈尊の説法の内容と戒律を確認しあい、正当な仏典として共に唱え、継承することを決議。当時、文字はあっても聖なる言葉は口伝が習わしだったという。

・ 第二結集：約100年後 根本分裂

戒律に関する十種の争点によって、保守派（主に南方、上座部）と革新派（主に北方、大衆部）に教団が分裂。以降約二百年かけて枝末分裂し二十一の部派が成立する。大衆部は大乗仏教の元となる。

・ アショーカ王の治世：約100年後 紀元前268-232年

暴君だったがのちに仏教に帰依。アレクサンドロス大王の侵攻を阻み、インド各地に仏塔を建立して広める（現在確認されるインド最古の文字は王の碑文）。スリランカに王子を派遣し仏教を伝え、初めてのパーリ語の聖典「ニカーヤ」（漢訳：阿含）が編纂される。

・ 第三結集：約200年後（上座部のみ） 論蔵と部派聖典

法・経典の解釈（アビダルマ）を散文でまとめた論書が編纂。各部派で経・律・論の三蔵が成立し、論は次第に難解な哲学に展開する。

主たる五部派に共通の経蔵（四阿含）には「如是我聞」など定型表現が用いられるが、のちに追加されたと見られる小阿含は韻文仏典である。これらには仏教特有の語句が少なく、ジャイナ教聖典や当時インド社会で広まっていた叙事詩や説話と共通の表現が多い。

著名なのは「ダンマパダ」（法の語句）「スッタニパータ」（経の集成）で訳書も多数。研究では「スッタニパータ」の原型は部派分裂以前に成立し、とりわけ最古層とされる第四・五章の句には釈尊在世の根本思想が伺える。（参考：安間観志氏の資料、「初期仏教」馬場紀寿ほか）

◆数年前から、古代インド・パーリ語による初期経典の学習会に参加している。言語学・文献学的に初期仏法の思想に分け入るのがとても刺激的。いったい古代の人はどのような洞察を経て、文字化してきたのか。

バラモンでは、司祭が言葉に宿る霊力や施主の贈与などによって、死後天界への再生を願う。この生天思想はやがて宇宙原理（ブラフマン）と自己（アートマン）の一致＝梵我一如へと変貌する。発想の転換？

仏教は当時の業や輪廻思想を継承しつつ、左記（いわゆる六師外道）と同じくインド思想批判の立場だ。

ただし「聖なる再生」には高貴な生まれ・階級ではなく、意志による行為だとした。善悪問わず「自業自得」を前庭としたのが特色である。

「欲望、生存、無知からの心の解放」こそが解脱であり、自己の再生産を停止した状態を、（煩惱の火が消された）「涅槃」とした。実に画期的だ。

表題の偈で、身・口・意の三業を倫理的に方向づけるような教訓が、のちに四諦（真理）・八正道（実践法）・四無量心などに体系化される。

偈の最後を中村元博士は「（死後天界の）神々の元に至り得るだろう」と訳す。私たちの言葉、行い、感受性をよりよく整えていく意志と実践が、真に尊いあり方、つまり輪廻の迷い苦しみから離れた悟りの世界へ通じていく。我々世俗にあって困難な道だが、なおさら見失ってはならない。（文責：報恩寺 林 暁）